臨床雑誌「整形外科」第59巻第11号 2008年10月1日発行(毎月1回1日発行)
1959年2月12日第3種郵便物認可
ISSN 0030-5901 Seikei Geka

ORTHOPEDIC SURGERY

臨床雑誌 整形外科

Vol. 59
No. 11
2008-10

論説 化膿性脊椎炎の臨床像……小久保吉恭ほか…1297

経験と考察 橈骨遠位端骨折に対するノンブリッジ創外固定術の適応と限界……藤村謙次郎ほか…1304
橈骨遠位端骨折に対する2.4 mm掌側ロッキングプレートを用いた最小侵襲プレート骨接合術の成績……川上幸雄ほか…1311
吸収性スクリューを使用した前十字靱帯再建術——5年以上経過例の成績……後藤 建ほか…1317

臨床室 上腕骨小頭骨折に肘頭骨折を合併したまれな1例……野村一世ほか…1323
徒手整復不能な母指指節間関節掌側亜脱臼の1例……廣岡孝彦ほか…1327
殿部巨大褥瘡に大腿骨開放骨折を併発し股関節離断となった1例……大山重隆ほか…1331
股関節骨切り術後深部感染症をきたしたが関節温存された1例……吉野正昭ほか…1335
下腿コンパートメント症候群の筋膜切開後shoelace techniqueで一期的に創閉鎖した1例……戸田一潔ほか…1339
第1楔状骨単独骨折の1例……大石崇人ほか…1343

短報フォーラム 大腿骨頭が新臼蓋から側方転位した股関節高位脱臼の1例……馬場智規ほか…1346

卒後研修講座 脊髄腫瘍の画像診断と治療……中村雅也ほか…1357

問題点の検討 慢性腰痛に対する薬物療法の治療効果を予測する……横田直正…1367

問題点の基礎的検討 異なった縫合方法による縫合半月の力学的強度……山本哲生ほか…1373

整形手術手技 吸収性アンカーを利用した鏡視下suture bridge法による腱板断裂の治療……北原博之ほか…1378

バイオメカニクス 異なるヘッド径，ネック径，回転中心位置の人工股関節におけるインピンジメントまでの可動域と脱臼までの可動域……吉峰史博ほか…1383

連載 整形外科医が知っておくべき骨・軟部腫瘍の組織像
横紋筋肉腫（胎児型，胞巣型，多形型）……長谷川 匡…1350

連載 いま基礎研究がおもしろい——整形外科医のラボ日記……宮本健史…1352

連載 専門医試験をめざす症例問題トレーニング
手関節・手疾患（外傷を含む）……西浦康正…1389

連載 最新原著レビュー
Perthes病における定量的予後予測法について……亀ヶ谷真琴…1396
家兎モデルにおけるヒアルロン酸による移植腱骨移行部の治癒促進の効果……柳下和慶…1399

誌説
前途ある若い医師たちに大いに期待する……吉川一郎…1316

私論
先端医療に対比される現実の医療……名越 智…1326

整形トピックス
脊髄損傷に対するアデノウイルスベクターを用いたBDNF遺伝子導入による神経保護効果……中嶋秀明…1330

Vocabulary
ペプチドワクチン療法……塚原智英ほか…1334

X線診断Q&A……高橋謙治…1355

喫茶ロビー
本を書く……井口 傑…1366

学会を聞く
JOSKAS 2008（第33回日本膝関節学会，第34回日本関節鏡学会）……高橋正哲…1403
第37回日本脊椎脊髄病学会……松山幸弘…1406

書評
『Critical Thinking 脊椎外科』……米延策雄…1402

診療余卓
シャブリ(Chablis)/デブリ(debris)……1329
優先順位……1342

お知らせ
山の手通八木病院整形外科医師募集…1303/三朝温泉病院整形外科医師募集…1310/赤磐医師会病院整形外科医師募集…1315/香芝旭ヶ丘病院整形外科医師募集…1322/第9回エピドラスコピー研究会…1372/第35回関東膝を語る会…1382/第10回スポーツ用装具を考える会…1395/第19回日本臨床スポーツ医学会…1405/日本臨床スポーツ医学会 チームドクター研修会…1407

Information（編集室から）……1388

別冊整形外科 No. 56
「関節周辺骨折——最近の診断・治療」要旨募集…1348

学会告知板……1408/**寄稿のさだめ**……1409

編集後記……1410

南江堂

喫茶ロビー

本を書く

井口　傑*

もうすぐ，義理の父の一周忌になる．それが仕事であったといえばそれまでであるが，専門書から子ども向けの漫画本まで，著書といえる本は数百冊を超える．そのうえ論文を書き，辞書を編集していたのだから，書いた量は半端ではない．4年ほど前，そんな義父に初めて書いた本を持って挨拶に行った．「どんな本でも本を一冊書くということは，命を削ることですよ．よくぞお書きになりました」．けなされるとは思っていなかったが，労ってもらえるとも思ってはいなかった．何せ数百対一，「臨床医なので立派な本とはいえないにしても，何せ自分だけで単著で書いたのは初めてですから」という，言い訳も必要がなかった．大げさにいうと，女房と結婚して30年，初めて義理の父に認めてもらえたかと，涙する気持ちであった．

開業医から勤務医，そして大学人と，人とは逆の人生を歩いてきたが，大学に在籍し，研究者，教育者の振りをしていれば，それはそれなりの依頼原稿もあり，締切に追い回されているとうそぶくこともできた．しかし退職を控えて自分の人生を振り返ってみたとき，時には対人的な思惑で，時には自分の不勉強な結果として，自分で責任をとらない，自分の本音でないことしか書いていないことに気づいた．同門の友人に，「お前は何時になったら総説でなく論文を書くのか」と，揶揄されるようになって久しい．自分では論文を書くだけの能力はあると信じつつ，教室の雑事に逃げてから久しいということである．定年を間近に控えて，自分の業績を整理し始めて愕然とした．せめて一冊は思う通りに書いてみたいと思う反面，思うことが本一冊分あるかとの恐れもあった．

そんな時期，心の底を見透かすかのように，ある出版社から本を出版しないかとの話がきた．「決して巷でいわれるような自費出版ではありません．取次店を通して書店で販売しますし，当社の費用で新聞広告も出します」．どこかで聞いた名前の出版社であり，見本として届けられた本の著者の中には知り合いや同業者の名前もあった．辞めるからといって教室が業績集を出してくれる身分でもなし，といってエッセイ集を出せる文才があるわけでもない．費用も初刷りだけ出版社と折半で，二刷りからは印税も出るということであるから，相手のいう通り，いわゆる自費出版でもないのだろう．女房に相談したところ思いのほか喜んで，手伝ってくれるとまでいってくれた．仕事が忙しくて書く時間がなければ，ライターに口述するだけで文章にまとめてくれて，後で手直しするだけで良いとまで出版社にいわれた．義理の父が珍しく新書本を次々と○○書房から出版していた時期で，数人のライターに口述して3週間で新書が一冊できあがるという話も確かに聞いていた．

良いことも悪いことも重なるもので，追いかけるように南江堂の礒前さんから執筆の話が届いた．今まで分担執筆の教科書には書けなかった，自分が後輩達に是非とも伝えたい臨床の手触りを，一から十まで自分の言葉で一冊の本にしたいと意気込んでいたので，だぼはぜの如く飛びついた．「半年，いや3ヵ月で書き上げます」．後から考えれば，その後出版まで支えてくれた礒前さんを始め，篠原さん，矢吹さんの面々は，後ろを向いて忍び笑い，いや苦笑いをしていたであろう．何せ自分では南江堂の仕事を終えてから，○○書房からも別のテーマで出版するつもりでいたのだから．

一冊の本の原稿が何枚になるかも知らないで始めたが，最低500枚と聞き，良い文章にするためには推敲して半分にする位が良かろうと，1,000枚を目標に書き始めた．書きたいことは山ほどあり，これまで10枚，20枚の制限に書きたいことも書けなかった欲求不満も手伝って，あっという間に300枚ほど書き上げた．この調子なら3月の退職までなどとはいわず，年内にも出版かとほくそ笑んだ．しかし，それから地獄が始まった．最初の意気込みが消え，書いては消し，書いては消しの繰り返しとなった．話がうまく繋がらない，もう一つ物足りない，いいたいことが上手く表現できない，短すぎる，長すぎる，半端であると，雑多の理由で筆が止まる．正月休みにじっくり時間を掛けて，年明けには気分を一新して，さらに旧正月まで持ち出したが遅々として筆は進まず，年内に脱稿の約束が，出版予定の年度末が近づいても最低の500枚がやっとであった．寝ても覚めても原稿のことが頭から離れず，他の仕事に逃げようとすれば女房が寄ってきて，全てを片づけてしまう．正に身の細る思いであった．

それでも叱咤激励の甲斐があり，退職までには，日整会までにはと，伸びに伸びた出版も，日本足の外科学会にはどうやら間に合わせることができた．もちろん○○書房からの出版の話など，金を払ってでも勘弁してもらう気分であった．義理の父の言葉が，心底ありがたく響いたものである．もう二度と一人で本一冊書こうなどと大それた考えは抱くまいと思った．

お陰様で今回も，日本足の外科学会にぎりぎり間に合うように『足のクリニックⅡ』を出版できた．

曰く，「大変だったんですね，『足のクリニックⅡ』を書くのは」．

「いえいえ，この話は『足のクリニック』を書いた4年前の話です」．

* S. Inokuchi：〒113-0021 東京都文京区本駒込6-6-7.